

河上肇記念会市民講演会

文人たちの歌―河上肇と湯川秀樹―

永田和宏京都産業大学教授、京都大学名誉教授

松野周治世話人代表あいさつ・講師紹介

本日はご多用の中、多数おあつまりいただきありがとうございます。ただ今より市民講演会「文人たちの歌―河上肇と湯川秀樹―」を始めます。司会を務めます主催者、河上肇記念会、世話人代表の松野周治です。最後までよろしくお願いいたします。

河上肇記念会は、河上肇の人格と業績を称え、広くかつ長く伝えるための研究並びに事業を行う「ため、45年前、昭和48年10月に発足しまし

た。初代の世話人代表は立命館大学総長を長く務められた末川博先生です。

『雲報』の発行、今日も午前中に行われましたが河上肇の墓のあります法然院での法要と総会、今回のような講演会などの事業を進めています。昨年は『賀乏物語』刊行100年記念講演会を京大の時計台ホールで開催しました。今年は河上の短歌を取り上げようということになり、永田和宏先生に講演を依頼したところ、超多忙にもかかわらず、快諾をいただきました。主催者を代表して心より感謝します。

永田先生は、昭和22年に滋賀県のお生れで、昭和46年、京都大学理学部物理学科卒業、森永乳業中央研究所研究員を経て、昭和54年より京都大学結核胸部疾患研究所講師。昭和59年より2年間、米国立癌研究所で客員准教授を務め、昭和61年より京都大学教授、胸部疾患研究所、後に改組し

て再生医科学研究所)。平成22年、京都大学名誉教授となり、京都産業大学総合生命科学部の創設にかかわられ、初代学部長。現在、同大学タンパク質動態研究所所長。この間、日本細胞生物学会会長、国際細胞ストレス学会会長などを歴任されています。

また、短歌の分野では、昭和42年、高安国世に師事して「塔」短歌会入会、平成4年より主宰となる。平成26年まで。現在、「塔」選者、朝日歌壇選者、宮中歌会始詠進歌選者などをつとめられています。

主な受賞歴

平成17年度 京都新聞大賞文化学術賞、平成21年 紫綬褒章受章、平成28年 ハンスノイラート賞を受賞されています。

短歌の分野では、歌集『アビウスの地平』により

昭和50年 第2回現代歌人集会賞、歌集『華氏』により平成9年 第2回寺山修司短歌賞、歌集『饗庭』により平成11年 第3回若山牧水賞など多数の受賞歴がありますが、最近では、永田和宏作品集1』により平成29年 第40回現代短歌大賞を受賞されています。

主要著書としては、第一歌集『アビウスの地平』より第十二歌集『夏・二〇一〇』、『永田和宏作品集I』、『青磁社』などの他、『タンパク質の一生』、『岩波新書』、『生命の内と外』、『新潮選書』、『知の体力』、『新潮新書』など多数出版されています。

今日は、年代並びに専門分野は異なるものの、日本と世界に大きな影響を与えた河上肇と湯川秀樹の短歌を、時代背景とともに永田先生に読み解いていただきます。それでは永田先生、よろしくお願いたします。

文人たちの歌―河上肇と湯川秀樹

永田和宏

河上肇 (『自叙伝』より)

書きたへてかへりみすれば思ひ出のわがおろかさへいとしかりける

「自画像」巻頭詠

旅の塵ははらひもあへぬ我ながらまた新たなる旅に立つ哉

大正13年 転地療養

たどりつきふりかへりみれば山川を越えては越えて来つるものかな

昭和7年入党(墓碑)

かくすればかくなるものと歌ひけむ古へびとのこころうれしも

昭和8年9月15日下獄

耐へがての寂しさならずひとやなれど時たちて今はた春は来ぬ

昭和10年 自叙伝、作歌

吉田山山のふもとに母と子が語らひつつも今飯食ひをるか

同

火をくぐり水をくぐりし学問の三とせ牢にありて微動だもせず

同 仮釈放を断念

かくばかりうれしき春をたゞひとり牢に迎へて牢に送れとや

昭和11年 次女芳子結婚

汝が父は牢にしあればことほがひつたなき歌よりせむ術もなし

同

ながらへてまた帰らむと思ひきやいのちをかけし旅にさすらひ

昭和12年出獄に際した手

湯川秀樹 (『深山木』より 1971.8、退官記念基金へのお返し、非売品)

潮さゝのわたつみの底はかりかねまたあまたたび吐息するかも

物理学に志して

常日頃うとみし友にあふごとく旅にしあれば歌思ひ出づ

車窓旅情

東山つばらに見ゆる窓とざし絶えなんとする脈をさがすも

生母の死に遭ひて

この星に人絶えはてし後の世の永夜清宵何の所為ぞや

原子雲

雲ちかき比叡さゆる日々寂寥のきはみにありてわが道つきず

昭和二十年も暮れんとして

思ひきや東の国にわれ生れてうつつに今日の日にあはんとは

ストックホルムにて

忘れめや海の彼方の同胞はらからはあすのたつきに今日もわづらふ

同

雨降れば雨に放射能雪積めば雪にもありといふ世をいかに

ビキニ死の灰以後

春あさみ藪かげの路おほかたは透きとほりつつ消えのこる雪

昭和三十一年歌会始召人

まがつびよふたたびここにくるなかれ平和をいのる人のみぞここは

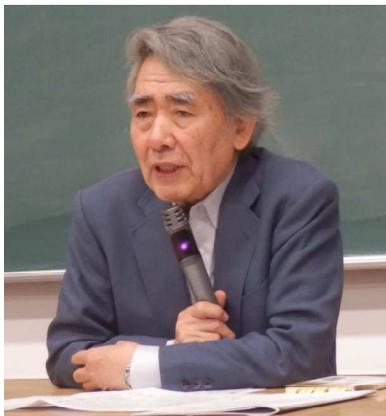
広島平和公園

わかれさす光かそけき深山木の道ふみわけし人し偲ばゆ

昭和四十五年、年頭

永田和宏氏講演

今ご紹介をいただきました永田です。今日は文人たちの歌―河上肇と湯川秀樹」と題しましてお話をさせていただきます。今日おいでいただいている方々の中には河上肇を尊敬してその業績を後世に残そうという河上肇記念会の方々が多いかと思えます。多分河上肇については私よりも皆さんの方がよくご存知だと思しますので、今日は「文人たちの歌」ということで二人を取り上げたということです。



私は日本にこうした短歌という詩型があつて、これが千三百年も続いていて、この意味は非常に大きいと思つています。私ほもう

50年以上も歌を作つてきている人間ですけれども、この短歌という詩型は歌人だけがやっているには惜しいと思つています。少し前までは専門の歌人でなくても歌を作る方は非常に多く、河上肇もそうでした。ところが最近になりますと非常に少なくなつてきて、短歌というのは歌人だけが作つている、そういう時代になってきました。とても残念なことだと思つています。

今ご紹介いただきましたように、私は「歌会始」の選者を長くやっております、ここまでは毎年、「吾人」を一人お招きして、その人は歌人ではないけれども短歌を楽しんで作つていらつしやる、あるいは嗜んでいらつしやる、という方で、それぞれの分野で業績のある方、いい仕事をして來られた方をお呼びするというシステムです。湯川先生も「吾人」になられましたし、金田 一京助さん、広辞苑を作つた新村出さん。南原繁さんは東大総長でしたけれども、近くは大岡信さんとか、西武の辻井喬さんとか、色々な方を呼んでいました。それが近年になつてきますとだんだんと難しくなつてきまして、歌人以外で歌を作っている方

を探すがとても難しくなってきました。これはとても惜しいことだと思っています。湯川先生には私も教えを受けましたけれども、その頃までは量子論の物理学者が歌を作っている、それも湯川さんは歌集まで出しておられる、というような状態がありました。日本人の誰でもが思い立った時に歌という詩型で自分の思いを語る、これが普通の社会であったわけです。これからもそういう社会になってほしいと思います。今すぐ来るとは思っていないませんが、来てほしいとは思っています。そういうことも含めて、今日は歌人以外の人が歌を作る意味はどこにあるのか、といったことを念頭に置きながら私の話を聞いていただければと思います。

それで河上肇と湯川秀樹という二人の巨人ですが、この二人の歌を取り上げることにいたしました。元々二人ともあまり歌は上手くない、残念ながらあまり上手くはないけれども、やっぱりその人の生涯、あるいは人生の時間に歌が寄り添っている、ということは随所に見られますので、そういうところも含みながらお話をさせていた

ければと思っています。皆さん方のお手元に資料が配られていると思いますけれども、河上肇の歌は『冒叙伝』から取り上げています。ここには歌を作っておられる方はごく少数だと思えますので、若干それぞれの歌の意味をお話しながら歌を鑑賞したいと思っています。

河上肇の歌

最初の歌は

書き了へてかへりみすれば思ひ出のわがおろ

かさへいとしかりける 自画像」巻頭詠

この歌は『冒叙伝』の中の「自画像」の巻頭に序歌という位置づけで5首ほど置いてあります。がその中の一首です。書き了へて」というのは、これは『冒叙伝』あるいは「自画像」という人生の一部を書き終えて、かへりみすれば、自分の人生を振り返って書いた内容を見ますと、思ひ出の中に自分の愚かさが色々と見えてくる。わがおろかさへいとしかりける、おろかなことさえ今こうして書き了えて見ると愛しく思われる、という意味であります。これは何か自分の過去の事

を書いている時には誰もが感じる思いだと思いません。

歌もそうでありまして、今日私が皆さん方にお伝えしたい一番のメッセージは、なぜ我々は歌を作るのか」ということです。私は今71歳になりますけれども、これまでの時間を振り返ってみますと、あんまり突出した時というのではないですね。本当に長い時間を過ごしてきたはずですけれども、自分の時間の大部分は「その他大勢の時間」ということで、何の特徴もないということですが、振り返ろうとしてもあまいまいことばかりで、何も出てきません。

歌を一首作っていると、その時間だけがとても「特別な時間」として自分の中に残っている、ということが感じられます。実は私の家は特殊な家で、私の女房は河野裕子と申しまして有名な歌人でした。正直歌では河野裕子にかなわないと今でも思っています。素晴らしい歌人で、与謝野晶子以来」と世間では言われておりますが、亡くなる前の日まで歌を作っていました。息子と娘がおりますが、二人とも歌を作っております。息子は

中学校の時から、娘は小学校の時から強制したわけではありませんが歌を作っております。その娘が20歳になった時に賞をもらって新聞記者の方にインタビューを受けまして、娘が言ったことは「歌を作っていると自分の時間に鈍りがついたような気がする」と言いました。私は「我が娘ながらいいことを言っているな」と思いました。自分の時間に鈍りがつく、この実感はすぐわかります。歌を一首作るとその時間だけが、自分の「その他大勢の時間」と違った鈍りがあったような気がする。私は生涯で作った歌が7千首ぐらいあります。『栗田和宏作品集1』には第1歌集から第11歌集までありますが、11冊の歌集をまとめた時に、19歳の時からですが、その歌をずっと読んで行きますと、ある一首を読むとそのことが起こった時の風景がありありと自分の中に蘇ります。私は日記をつけないのですが、その時の風においまでがふつと再現されるわけです。私は7千首の歌を作ったということは7千の時間がそこに残っているということでありまして、このことは歌を作っていらいっしやらない方と比べて、

とても豊かなことだと思っております。

私たちは意識的に過ごせる時間というのは、ただかだか70年か80年、その程度だと思えますけれどもその間に自分の時間がきちんとした言葉として残っていてその歌を読むと、あの時あのようなことがあった、どのように感じた」ということがまざまざとリアルな感覚で思い起こされる。これは歌を作っている人間の特権だと思いますし、本当にこういうのを読み直してみますと、歌を作っていてよかったとしみじみ思います。今からでも遅くないと思えますので是非、歌を作るということをお考えいただければいいと私は思っています。

河上肇の心の中にも、あの時ああしておけばよかった」とか色々な思いが去来しているわけですが、その思いのひとつひとつがやはりこうして言葉として残っていきますと、自分の愚かささえもが愛しいと思われる、そういう歌ですがとても実感できる、納得できる歌だと思えます。

2首目も有名な歌ですが

旅の塵はらひもあへぬ我ながらまた新たなる

旅に立つ哉 大正13年 転地療養

昭和3年に河上肇は京都大学を辞職することになります。権力側からの要請というか圧力があって、教授会がそれを決定して学部長に申し渡されるということですが、河上肇はその時の歌だと思っていた。京都大学を辞めてまた新たな旅に立つ」と自分で思っていたのですが実はそうではなくて、

「これはもつと前に作っていたことがわかった」ということが『冒叙伝』に書いてあります。これは実は学部長時代に河上肇が病氣をして和歌山の望海楼、海を望む旅館に転地療養をしておりました。そこで地元の人たちが河上肇のもとに毎日のように押しかけてきて色々な話を聞き教えを乞う、そのような状況の中、河上肇がいろんな歌を書いていくわけですが、その中の「一首だということが後にわかります。なぜ、また新たなる旅に立つ」と書いたかと言いますと、その後に書いてありまして、大正13年のことですが、こんなふう

に書いています。私はその前年の秋にそれまで何年か続けてき

た経済思想史の研究を一纏めにし、資本主義経済学の史的発展」と題する可なり分厚の著作を公にしたが、これが公刊の十月月を経て大正十三年七月一日発行の「改造」誌上には、榎田民蔵君の「社会主義は闇に面するか光に面するか」河上博士著「資本主義経済学の史的発展」に関する「感想」と題する長編の論文が現はれ、私は手厳しい批判を受けた。河上筆はマルクス主義を標榜しているけれども、この著作は、マルクス主義の立場から見れば、頗るなっていない。かう云うのが批判の要領である。私はこの榎田君の論文を読んで、若干の箇所には善意を欠いた誤解の存することを感じないではなかったが、しかし大体の趣旨に至っては、榎田君の所説が尤もであり、私は確かに急所を突かれてゐる、と思わざるを得なかった。私は一本参った、といふ感じを、強く受けた、と同時に、私は大奮発をなし、これから一つ出直して、是が非でもマルクス主義の真隨を把握してやらう、と決意した。

と書いています。

これがある意味、マルクス主義者としての河上肇の出発点になったわけで、そういう歌だということが後にわかったわけですが。また新たな旅にたつ哉」というのは、一生懸命頑張った出した「資本主義経済学の史的発展」という大著をようやくまとめたとたんに大批判を受けて、それもなるほどそうだということになって、次に新たな旅に出るかなと、その時の決意表明であったわけです。その時に批判を受けてちよつとショックだったわけですが、その時にこの歌が詠まれたということとはとても大事なことだと思います。

次の有名な歌で皆さんご存知だと思います。

たどりつきふりかへりみれば山川を越えては
越えて来つるものかな 昭和7年入党 墓碑)

昭和7年に共産党に入党した時の喜びを詠んだ歌ですが、これは法然院の河上さんのお墓にこの歌が書かれています。これは万葉仮名で書かれていてこの碑を見ながら読み解くのはなかなか大変ですけれども、私もお墓が好きで河野裕子と付き合っていた頃のデートコースになっていました。法然院には、谷崎潤一郎の墓、川田順、福

田平八郎、堂本印象の墓もあります。九鬼周造の墓、そして物理学者の玉城嘉十郎の墓もあります。ということで、あそこを歩いていると本当に興味が尽きません。静かですし人がいないのでデートするにはもってこいのところですよ。

このあと河上肇は地下に潜って、半年足らずの後昭和8年の1月に検挙されてしまうわけです。河上肇はそれ以前にも共産党には月々百円ぐらいの寄付もしていて、今で言うと20万円くらいだという話ですが、その額が千円になるときもあり、色々金銭面でサポートをしていたのですが、昭和7年になってようやく入党が許されます。この時に入党した感慨がこの歌に表れています。

自画像」という河上さんの「宵叙伝」の中の一節の結びのところはこの歌があります。自己描写」という文章があります。これは自分の人生を振り返りながら出獄を前にしながら書いた文章だと言われています。その中に自分ほどのような人間なのかを書いているところがあります。なかなかこれはすごいと思いました。

何らの自主的な性格を持ちあはせない、いつ

も何かに影響され、支配されるヨタヨタした存在」。杉山平助の眼にかかるものとして映じた私。しかも自分では、真理を求むる柔軟な心」の持主であり、苟くも自分の眼前に真理だとして現はれ来ったものは、それが如何やうなものであらうとも更に躊躇することなく、いつでも直ぐに之を受け入れ、そして既に之を受け入れた以上、飽くまで之に喰ひ下がり、合点のゆくまで次から次へと掘り下げながら、依然としてそれが真理であると思はれる限りにおいては、敢て身命を顧慮せず、毀誉褒貶を無視し、出来うるかぎり謙虚な心をもって、無条件的に且つ絶対的に徹底的に、どこまでもただ一筋にそれに服従し追隨してゆき、遂には、最初はとも夢想だもしなかつたやうな、危険な、無謀な、あるひは不得手な境地に身を進めなければならなくなっても逃避せず尻込みせず、無上命令に応召する気持で、いのちがけの飛躍をなすことを敢て辞しないが、しかし、かうした心掛けで夢中になって進んでゆくうちに、最初真理であると思つて取組んだ相手がさうでなかつ

たことを見極めるに至るや否や、その瞬間、一切の行掛りに拘泥することなく、断乎として直ちに之を振り棄てる。これが私の人格の本質である。」と自画自賛を敢てする私。

と言っています。

これはすごいですね。今読んだところは一度も「がないのです。文章がずっと続いているわけです。これが河上肇が、自分というのはいくつか人間だ」という、最終的なある種の結論である文章で、これだけのことを自分について堂々と書けるということは、私は半ば呆れながらすごい文章だと思います。

このような自分の性格を知りながら、河上さんがようやく入党をした。河上肇は自分でも言っているように実践活動には向いていないということとは最初から思っておられたのだと思いますが、そうは言っていない社会情勢がありまして、ここに書いてあるように、自分でも絶対的に徹底的に突き進むためには「共産党に入党して活動しなければならぬ。そういう切羽詰まった思いがようやく実現して入党を許されたという時に、こ

の歌を詠んで感慨に思い至るわけです。とても強い深い想いだっと思えます。ただその「自画像」のすぐ後にはこんな文章が続いています。これはさっきの自画像の自画自賛とは裏腹に、心の隅にあった本音に近いところだと思いますが、

静かに書斎に蟄居することを最も好む私が、無産者運動の実践に参加するなど云ふことは、曾て夢想もしなかつたところである。況んや、広く世間に顔を知られてゐる自分のやうなものが、世界一の警察国たる日本において地下の非合法的活動に参加すると云ふに至っては、もとより沙汰のかぎりであり、その無謀は遙に常規を逸してゐるが、損にならうが得にならうが、迫り迫つて、遂にはさうした所へでも、逃避せず尻込みせず、行かなければならぬと信ずればどこまでも行く、かういふのが私の人相の特徴であり、この特徴的な顔面筋を思ひ切つて筆ぶとに描きおろさなければ、私の似顔は出て来ない。自分ではさう思つて、この「自画像」を書いて見たのである。

これが「自画像」の結びにある言葉ですが、元々

は書齋にこもって理論的なことをしているのに向いている自分が、無謀を承知の上である種のはやる思い、というのがこの一首に出ているのだろうと思います。歌を本気でやっている人間からすれば、越えては越えて来つものかな」というのは詩的にはもう一つダメだなあと思いますけれども、そういうことを外して言えば、河上肇の心躍りといったことがよく見えていると思います。

その後、昭和8年に懲役5年の判決を受けます。それで河上さんとしたら 執行猶予になるのでは」と期待をしていたわけですが、判決の日も 執行猶予になる」と思い、獄衣を脱ぎ捨ててそのまま出口に行つて弟に頼んでタクシーを呼んで帰るんだというところまで夢想した。こうなると半分は思っていたのですが、ところが7年の求刑に対して5年という判決が下りる。そこでショックだったのですが、すぐに切り替えて「5年ぐらい」と思い始めます。控訴するかどうかということをお考えしますが、控訴断念します。

これは私も読んで少しびっくりしたのですが、その理由が 今判決を受けておかなければ控訴し

て時期が後になると恩給法が改正になって恩給をもらえなくなる。だから今刑を確定した方がいい」ということを獄吏から耳打ちされた。それでうんそうかと言って決心をしたわけです。ある意味とても俗っぽいけれど正直でもある。これは河上肇という人のイメージをちよつと変えるわけですね。それで後でも それでよかった」ということを書いておられて、そういうことが一つの契機になって、5年の刑期をつとめることになりました。それはそれでいいと思うのですが、そのことをあからさまに書くということが、後になって公表されるということをどのくらい意識されていたのか。使命に燃えて自分の意思で共産党に入って地下に潜つて、捕まつて5年の判決を受けて控訴するかどうかという時に恩給で決める、それを書くということをお考えしますが、逆にならぬと思いましたが、そういう記述が随分とあるわけですが、この時にこういう歌を読むわけです。

かくすればかくなるものと歌ひけむ古へびと
のころうれしも 昭和8年9月15日下獄
これは、かくすればこうなるものだと歌った人

がいる、古人です。その古人の心が嬉しいと感じられる。この人は誰かと言うと吉田松陰です。吉田松陰の有名な歌がありまして、

かくすればかくなるものと知りながらやむに
やまれぬ 大和魂

よくご存知のように河上肇は吉田松陰に対して非常に大きな尊敬の念を持っておりまして、同じ山口県の生まれでもありますし、吉田松陰の墓にも何度も参っております。そのくらい私淑をしていた吉田松陰の歌をここに引いてきて、吉田松陰は、「こうすればこうなることを知っていた、けれどもやむにやまれぬ思いで自分はこうしたそれが大和魂だ」と詠んでいるのですが、和歌には本歌取りという手法があります。誰かの詠った歌を取ってきてその心を自分の思いに寄せながら自分の思いとしてとして表現をするこれを本歌取りというわけです。

河上肇は、昔の人はこのように詠んだけれどもその心が嬉しい、と言っている。こうすればこうなるとわかっているもやむにやまれぬ思いで今こういう行動を取ったという、吉田松陰の心を

うれしいと思うし、自分の今の気持ちも同じだ、ということでも詠んだのがこの歌です。

判決に控訴しないで受け入れて獄に下るということになりましたが、昭和8年9月15日、控訴取り下げの手続きを取って5年という刑が確定をします。

即ち昭和八年九月十五日、この日を出発点として、私は向ふ五ヶ年、前途一千八百二十五日に互る長途の旅に立ったのである。」

この時に控訴の手続きを終えてから、友人に手紙を出しています。その手紙の中にこの歌があります。

古人は僅か半歳の旅に立つとて、一尤も昔の旅はいのちがけの旅ではありませんでしたが、前途三千里の思ひ胸にふさがりて幻の巷に離別の泪をそそぐ。」と書きました。一千八百余日にわたる長途の旅を前にして、敗残の老書生、何とはなしに秋のあはれを感じないでもありませんが、しかし、かくすれば、かくなるものと歌ひけむ古へびとの、こころうれしも。」などと口吟しながら、元氣よく、踏縦横に踏んで

出発いたしましたから、憚ながら御安神を願ひます。何とかして無事にこの旅を終り、再び御目にかかれる日のあらむことを望み居ります。謹んで御健康を祈ります。敬具。」

これが河上肇が自分の刑が確定をしたということと友人にあてて出した手紙だそうです。その時河上肇は55歳で、この刑が終了すると60歳。その当時のことですから60歳と言うとかなりの年で、河上肇は自分が60歳になつているとどうなつていようと思ひながら、5年という刑に服することになります。

次からの数首は獄中の歌ですが、

**耐へがての寂しさならずひとやなれど時たち
て今はた春は来ぬ** 昭和10年 自叙伝、作歌

耐え難い寂しさではない、牢屋ではあるけれども時が経てば今、はたというのはまさにという意味ですが、はた春は来ぬ。牢の中にいるけれども春は来る。その季節の巡りを喜んでゐる。このころから河上肇が本格的に作歌を始めようと決心していることが書いてあります。同時に自叙伝を執筆しようと決めて、その所長に許しを得て自

叙伝を書き始めるわけです。この時の面白いのは、この当時の文章は「彼は」ではなくて、別の第三者、三人称で書いていて自分のことを「弘蔵」という名前で書いています。奥さんの名前も娘の名前も全部違う名前で書いてるのが特徴です。このように三人称で書いているところが面白いのですが、「彼は」というのは自分のことですが、

「この頃から歌を作り始めた。どの歌も皆拙いが、兎も角この頃から歌を作りたいという衝動が萌してきたことの証拠に、少しばかりここへ書き抜いて置かう。」

**耐へがての寂しさならずひとやなれど時たち
て今はた春は来ぬ**

もう一首ありまして

**一年は夢とすぎ去り今はまた荒川堤草萌えむ
とす**

牢に入つて一年が経つて春になつて荒川堤に草が萌えようとしている、この歌は前年の春、重子(奥さんのことですが)寄越した歌に、「ひとやなる君をたづねて帰るさの荒川堤草萌えにけり。」とあったのを思ひ出して作った歌です。弘

娘の結婚式に父親として何もしてやることができな
ない。せめて歌をもって娘の結婚を自分でも祝
いたいし、娘にも自分の思いを知ってほしい、そ
ういう歌ですね。特に2首目は、汝が父は牢にし
あれば、ことほがひ、つたなき歌より、せむ術もな
し」娘に対してはその場に行つて祝つてやること
もできない。こんな拙い歌だけでも、この歌で
結婚を祝うより他すべがないと歌っています。

最後の歌は昭和16年6月、出獄したときの歌で
す。

ながらへてまた帰らむと思ひきやいのちをかけ
し旅にさすらひ。

出獄をした時に、家に新聞記者が集まってきた
記者会見をするわけですが、重子さんが（奥さん
ですが）その後の会見の場を取り持つて、記者会
見を早々に引き上げてしまいます。これは東京朝
日の記者の書いた文章ですけれども、そこだけ読
んでみましょう。

記者団と共同会見の約束の十時丁度に、老博
士は、狭い庭に面した階下縁側の硝子戸を静か
に開けて四年振りの姿を現はした。皆さん御苦

勞さまですと一言。例の長身をセルの単衣に鉛
の羽織に包んで庭に降り立った姿は痛々しいま
での窶れを見せ、頭の白髪もめつきり殖えてゐ
る。カメラ班の注文に応じて黙々と坐つたり歩
いたり、質問を一切無視して喰ひしばつた唇に
往年の鬪志を偲ばせてゐる。かくて約十分、語ら
ざる会見を終へた博士は、令弟武雄氏に援けら
れて二階へ姿を消してしまつた。あとを重子夫
人が引とつて記者の質問に答へるのも、書きま
したものに於る通りでその外は何事も申せませ
ん」の一点張り。ぼつりぼつりと祝電が舞込むの
だが、出所の家とも思われぬ静けさである。生活
の急変を慣れて食事もなるべく質素なものを選
ぶ方針だとのこと。主人は別に好物もありませ
んし、何の準備もして居りません。みんな疲れて
ゐますので今日はこれでお許し願ひます。」と障
子を閉ざすのであつた。」

河上博士がやつていたというのは記者の目にも
明らかで、奥さんとしては自分の夫をいたわつ
て、記者との間に入つてなるべく夫に負担がかか
らないようにという配慮をしています。博士が出

て来られた時のリアルな様子というのはこの朝日新聞の記事にでていると思います。

この最後の歌は高所から自分の感慨を詠んだ歌で、その時記者団に配った河上肇の手記の中にある歌ですが、

私はもう之で「学究としての義務を終へたものと諦め、今後はすつかり隠居してしまつて、極く少数の旧友や近親と往来しながら、刑余老残の此の瘦軀をただ自然の衰へに任かす外なからうと思ふ。既に鬪争場裏を退去した一個の老廢兵たる今の私は、ただどうにかして人類の進歩の邪魔にならぬやう、社会のどこかの隅で、極く静かに呼吸をしてゐたいと希ふばかりである。――歌を三首あり、併せ録して人の嗤ふに任かす。ながらへてまた帰らむと思ひきやいのちをかけし旅にさすらひ。長き足をらくにすわれと吾妹子が縫うて待ちにし此の座蒲団よ。巖清水あるかなきかに世を経むとよみいでし人のいのちしのばゆ。」

1首目の歌は高所から自分の思いを述べている

のに対して、2首目の歌は、奥さんが自分の出獄を待って一日千秋の思いで座蒲団を縫って待っていた、多分弱つていて足も悪く座るのもままならないだろうからと、自分の長い足に合うような座蒲団を作って待っていてくれた。これは何も言っていないけれど奥さんへの感謝といたわりの気持ち都在这里に出ている、そういう歌です。

湯川秀樹の歌

次に湯川さんの方に移ります。湯川秀樹はご存知のように日本で初めてノーベル賞を取った学者ですが、実は私の恩師と申すにはおこがましいのですが、ご紹介をいただいたように私は高校時代に「世の中のことは物理があれば全部解ける」と、微分方程式と初期状態さえあればこの世の中のことは全部解けると思つていて、物理の成績は結構良かったので迷うことなく湯川先生がおられる、ということでご京都大学理学部に入りました。高校の時は成績が良かったはずなんです、たちまちにして落ちこぼれてしまいました。私は

「三重苦」と言っているのですが、一つ目は当時の大学紛争です。当時の京都大学は完全にロックアウトで授業も試験もありませんでした。私はノンポリでしたがそれでも友達と議論したりデモにも行きました。夕方になると大学にやってきて焚き火をして友人とディスカッションをして始発電車まで帰る。そんな生活で京都大学の机もだいぶ燃やしてしまいましたけれども、法経一番教室などは椅子も何もなくって、私の友達が共産党系の民青で私は民青でも何でもなかったのですが陣中見舞いに行つて、その頃「三派全学連」と言っていましたけれども、当時の全共闘ですが、彼らに法経一番教室が囲まれて暗闇の中で石や火炎瓶が飛んでくるという衝撃を受けました。法経一番教室は広すぎて、窓がたくさんあります。守り切れないわけですね。そこでこの法経七番教室に逃げてきまして、入り口に板を張ってバリケードを気づいた。そこに外から石が飛んできます。火炎瓶は飛んでくるのが見えるわけですが石は怖いですね。電気がついていない真つ暗な中で大きな石が飛んでくるわけで、あの時はさすがにも

うこれで死ぬのかなと思いましたがけれども、最後にはそこから飛び出て逃げ帰りました。とんでもない事件でしたけれども、学問的にはどうかということは別にして、いい時期に学生時代を送ったと思っています。

二つ目は短歌に出会ったことです。短歌漬けの生活は非常に面白かったので、学生短歌会と「塔」という結社に入り、また同人誌を作つて、この三つの短歌会で週何回かみんなが集まつて議論をする。三つ目が恋人と会ったことですが、悪いことに恋人と短歌がリンクをしていました。彼女は河野裕子さんと言いますが、もう物理からすっかり落ちこぼれて先ほど紹介がありましたように、企業に流れていって、ただそこで学問の本当の面白さに目覚めたということです。

資料にも紹介をしておりますが「知の体力」という最近出した本があります。この中で特に若い人たちに聞いてほしいメッセージを込めたものですが、挫折することの大切さ」ということ、挫折しないで人生を送るということの危険性」を書いていきます。私はできるだけ早い時期に若者は1

回か2回は挫折をした方がいいと思っています。何か選択の機会があった時に、安全な方を選ぶか面白い方を選ぶか。京都大学というのは「おもしろい」を大切にしている大学ですが、私も教室では「何かチャンスがあったら安全な方よりもおもしろい方を選ぶ」と言い続けてきました。私の教室にはそういう伝統があつて、いろんなことを考える時に、あるデータが出た時に、「こういう可能性がある」、「こういう可能性もある」ということを実験的に証明する時に、安全な方を選択する方が確実性がある。ただそれを証明してもあまり面白くない。多分失敗するけれど、こう考えたら面白いビジョンが得られるという可能性の方からまず実験してみる。常に二つのチョイスがあったら必ず面白い方から選べということを言い続けてきました。

自分の人生でもどこかでおもしろい方を選んできたと思っています。私は物理で落ちこぼれたわけですが、企業に入って研究を実際に自分でやり始めるととても面白くて、割と面白い事ができそうになって出世間違いなしになったのですが、29

歳の時に企業をやめてしまいました。それで京都大学に帰ってくるわけですが、職があつたわけではなくて無給でした。その時すでに結婚していて河野裕子さんとの間に1歳と3歳の子どもがいました。めちやくちやな決断をしたのですが、私の人生で最大の決断だと思っています。研究者というのは何年か無給で勤めたら給料が得られるという保証は全然ありません。ある意味ですごい無茶な、無責任な、親としては失格な選択かもしれないでせんでしたけれども、自分の一回しかない人生でこんな研究というのが面白いのならやってみようと思つて京都大学に帰ってきました。

その後ありがたいことに職も得られて、自分の人生を思いみると今ではちよつと無茶とも思えるこの選択はよかつたと自分では思っています。子どもさんやお孫さんが人生の選択のことで相談に来た時は是非「二回は面白いことをやりなさい」と言つてほしい。私は責任持ちませんけれども、やっぱりおもしろいことをやるのが大事だと思つています。

私は湯川先生の最後の講義を受けました。物

理学通論」という講義でして、基礎物理学研究所で週一回湯川先生が講義して、先生が退官する前の年でした。まさに滑り込みセーフです。良かったですね。先生が何をお話しされたのか、内容はもう全部忘れてしまいました。私にとっては湯川秀樹の最後の年に間に合ったということ、それは私が研究者になった30代から今まで、自分の研究者人生をどこかで支えてくれていたという気がします。やはり本物に会ったということがある種の支えになっていると思います。

湯川さんの言われたことで、役に立つ、役に立たない」ということを覚えています。役に立つ」ということについて、「いま役に立つ」ということは10年経ったら役に立たなくなるよ」ということ。今は役に立たなくてもやるのが大事だ」。今、日本でノーベル賞が出るたびに受賞された皆さんがそういうことを言われますが、私も全く同感です。大隅良典さんが3年前にオートファジーでノーベル賞を取られましたけれども、彼は私の20年来の友人で何度もいろんなところで一緒に話をしていただけますけれども、あの大隅さんのやったこ

とも最初は何の役にも立ちませんでした。それが基礎研究で現象が面白いと思ってるやっていたことが役に立った。今回のノーベル賞の本庶さんの仕事もオプジーボという抗がん剤という新しい治療法を開拓されましたが、最初は全然違う免疫の基礎理論の研究でした。iPSの山中さんも、私は再生医科学研究所にいた時に隣でいましたので古くからの友人ですが、彼も最初は細胞の分化のメカニズムに興味を持ったわけです。皮膚の細胞が何にでも分化できる幹細胞に戻る、卵細胞がそうですね。それが再生医療という非常に大きな分野につながった。これはとても大事なことだと思っています。

湯川さんの歌の1首目は、湯川先生は「深山木」という歌集を出しておられまして、これは退官記念の時に基金が集まってそのお返しとして作られた歌集ですけれども、その中に、

潮さゝみのわたつみの底はかりかねまたあまた
たび吐息するかも 物理学に志して

この歌は自分が物理学を志して真理を探索しようとするけれども、いつまでたっても底にたどり

着かない、底が見えない、と言って吐息をする。これは物理学者、あるいは学者の本音ですね。これは湯川先生が色紙を書いてくださいまして、我々の学年が卒業記念の手製のアルバムを作った時は、自分たちで写真を焼いて貼り付けてそれをまた写真に撮ってアルバムにしました。そんなアルバムを自分たちで作っていましたけれども、湯川さんが歌を作っておられるそうだよ」ということで、厚かましくも湯川さんのところに色紙を持って行きますと、この歌を書いてくださいました。

君たちも学者になったらこういうことになるんだよ」と言うメッセージだと思います。あの色紙はずっと私の机の引き出しの中にあっただんです。私はその頃歌人として割と知られていましたので、永田お前が持っておけ」ということで時々色紙を出してみたりしていました。卒業する時に持って行こうかなと思っただのですが、若いというのは正義感があるんですね。これを私してはいけない」と思って教室に置いて出てきました。今はどこにあるのか分かりません。あれは

貰っておくべきだったと未だに悔しい思いをしています。

湯川先生にとっては私たちは孫みたいな世代ですから、一年間「物理学通論」は本当に楽しい午後の陽だまりのような時間でした、この一年間は。古典力学から量子論まで、悠然として楽しみながら授業をしておられました。湯川先生以降では「物理学通論」という講義はなくなってしまう、と言うか「通論」について話ができる人がいなくなりました。あまりにもそれぞれの分野が細分化されてしまっただけで、いろんな分野を一人の人間が講義するということがほぼ不可能になりました。本当に良い時に学生時代を過ごしたと思っています。

3首めは、

東山つばらに見ゆる窓とぎし絶えなんとする
脈をさがすも 生母の死に遭ひて

これは湯川さんのお母さんが亡くなった時の歌ですね。東山が見える病室で、なくなるうとしていられるお母さんの脈を必死で探つてという歌ですね。

次が大事な歌です。

この星に人絶えはてし後の世の永夜清宵何の
所為ぞや 原子雲

これは「原子雲」というタイトルでうたわられていて、もちろん広島・長崎に原爆が落とされたあとの歌です。最近湯川さんの日記が見つかり「F研究」という名前で京都大学の物理系の教授がその研究に携わっていたということがわかりました。でもほとんど基礎研究の域を出ていなくて、連合軍もこの研究ははるかに実現性から遠いということでは何のお咎めもなかった。これは権力から要請されてのことでやむを得ないことだったのですが、湯川さんも一時関わっていたということとで長く口をつむいでおられた。

ただこの歌は大したもの、この星に原子爆弾で人が絶え果ててしまった、その後の人のいない世」ということで、「永夜清宵」、これはなかなか難しいのですが、ご存知の方もあると思うのですが『雨月物語』の中に「青頭巾」という話があります。

あるところでお坊さんが稚児に恋をして、稚児

が亡くなってしまい、あまりにも悲しんでずっとその稚児を置いていて、結局食べてしまうのです。その後人を食うようになり、墓を荒らしたりして人を食う、里まで行って人を食う。みんな怖がって近寄らなくなった。そこへ旅の僧がやってきて、村人の話を聞いて、その寺に泊めてもらう。狂ったお坊さんは旅の僧を泊めて食べてしまおうと思うのですが、寝ている僧のところに行っても姿が見えない。朝起きると僧はちゃんとそこにいる。そこで旅の僧に助けを求めて、私はどうしたらいいのでしょうか」と尋ねた。そしたら旅の僧が青頭巾を狂ったお坊さんに与えて、そしてこう言います。「江月照松風吹永夜清宵何所為」、このお坊さんはこの言葉の意味を考えなさいと言って去る。それ以降村には人を食うお坊さんは現れなくなりました。そして旅の僧が3年後に帰ってきますと、もう人を食う僧は出てこなかった。そこで旅の僧は元の山寺に行きまして見ますと、青頭巾をかぶったお坊さんがじっとこの言葉を唱えて座禅を組んでいた。杖でポンと叩くとお坊さんはさっと消滅してしまっただけ。という物語です。

この文章の意味は、月が川面を照らしている、松に吹く風は爽やかで、この長い清らかな夜、これは何のためにあるのか、という意味です。これは何のためにというよりもそこにあることが大切なのだというような、禅としての解釈もあるわけです。それについての謎証しはしていません。

湯川さんはこの文章から取ってきているわけですね。この星の人が原子爆弾によってみんな絶えてしまつて、その時に誰もいない清らかな宵は一体何のためにあるのか、というのが湯川さんの歌です。私は最初何のことか分かりませんでした。この「雨月物語」の「青頭巾」という話を元に考えると湯川さんの言いたいことはよくわかる。元々は人間の利益の追求、あるいは国を守るためと称して、結局は人間全てを滅ぼしてしまうこの原爆、そして人がみんな絶えてしまった後で清らかな夜が来ても一体何のためになるんだ、ということを問いかけているのがこの歌だと思えます。もちろんご存知のように湯川先生はパグウオッシュ会議もやっておられましたし、世界から原爆をなくする世界連邦を作るといふ働きで最後まで

で活動されました。特に原爆については自分も最初の出だしに一端は関わっていた、そういうことの中から非常に強く危機感を持つておられた。そしてアインシュタインと二人でこの世から原子爆弾を完全になくするのだということ約束された。アインシュタインが先に亡くなりましたので自分が後を継いでやらなければいけないということを決意されたのはよくご存知だと思います。

最後から4首目、

雨降れば雨に放射能雪積めば雪にもありといふ世をいかに　ビキニ死の灰以後

雨が降れば雨に放射能、雪が積もれば雪にも放射能がある。そんな状態をいかにしたらいいのか。これはビキニの死の灰が日本にやってきた、その時の歌ですけれども、これは現在の福島の事態にも通ずる歌で、こういった状態をどうするのかという歌だと思えます。

それからその前の2つはノーベル賞をとられた時の歌です。

思ひきや東の国にわれ生れてうつつに今日の

日にあはんとは

ストックホルムにて

忘れめや海の彼方の同胞はあすのたつきに
今日もわづらふ

同

1949年の歌です。終戦の4年後ですから日本はまだ貧困のどん底にあった。湯川先生は、みんな明日の食べるもの、明日の必需品もなくて今日も思うというような生活をしている。そんな時にこの国に来てノーベル賞の勲章をもらった。

忘れめや」忘れるだろう、いや忘れてはならない。自分はこんなにみんなから祝福をされているが、日本の現状を考えたらここで能天気であることはできない、という歌だと思います。

その次の歌は歌会始の時の「吾人」としての歌で、この時のお題は「早春」ということだったと思うのですが、

春あさみ藪かげの路おほかたは透きとほりつ
つ消えのこる雪 昭和三十一年歌会始 召人

これは非常に良い歌だと思えますね。春が浅いので雪があるんだけど透き通るように消え残っている、そう言った藪かげの路を詠んだ歌です。この歌はテクニクとしても素晴らしい、い

い歌だと思えます。湯川先生も河上肇もどちらも自分の思いを直接何とか伝えたいという意図がすく出ていますので、歌としては少し膨らみがなくなる歌が多いのですが、意思表示のような歌が結構あるのですが、この歌はいい歌ですね。

次の歌は広島平和公園で碑になっています。

まがつびよふたたびここにくるなかれ平和を
いのる人のみぞこは 広島平和公園

平和公園に行くところには平和を願う人たちがばかりで、原爆の日は二度と来るな、という歌ですね。歌としてはもう一つだと思います。

最後の歌ですが、

わかれさす光かそけき深山木の道ふみわけし
人し偲ばゆ 昭和四十五年、年頭

これはいい歌ですね。ここには山深いところまで道ができていて、いくつもの道がある。この道が先に行った人がいる、と先人の業績の中で自分が生かされているというのがこの歌に込められています。自分の業績も自分が開いてきたのではなくて、前の人の業績があつて今の自分があるんだということの意思表示です。こういう思いが科学

者にはすぐく大切なことだと思えます。

ノーベル賞受賞した山中伸弥さんに私の京都産業大学に来ていただいて、対談したことがあるのですが、その時彼が言った言葉は非常に印象に残っています。科学者というのは一枚一枚、自分が剥がすべき真理の薄皮を剥がしている。誰かが剥がさないと次の皮は剥がれない。そしてまた次の人が皮を剥がす。ある時皮を剥がしてみたらそこに素晴らしい発見があった、これがノーベル賞になった。」ノーベル賞を取った人は偉いんだけれどもノーベル賞を取るためには前の人が上の皮を剥がしてくれていないと、その次の皮は剥がれないんだ、ということも山中さんが言ったことを覚えています。非常に良い言葉だと思います。湯川先生のこの歌も前の方がたどった道がいっつもあってその道を行った先人の業績が偲ばれるということ、これはいい歌だと思います。湯川先生についてはもっと個人的にも言いたいことがあるのですが、最後に一言だけお話をしておきます。私は朝日新聞の歌の選者をしておりますがもう一つ九州の鹿児島南日本新聞とい

うところでも30年近く歌の選者をしております。その中で年間賞に選んだ歌ですが

逝きし夫のバッグの中に残りいし二つ穴あく

テレホンカード

私はこの歌の作者に会ったことはありません。普通の女性ですが、年間賞に選んだので、この歌の背景がわかりました。この女性の旦那さんは長く病院で入院しておられて、当時は携帯もなかったですから、この人が毎日看護婦詰所のところまで来てテレホンカードで奥さんに電話をしていた。それで奥さんも今日はこんなことがあった」と、このことが日課になって毎日夕方になると電話をしていました。その旦那さんが亡くなった。後に残されたバッグの中にテレホンカードがあつて二つの穴があつた。そのカードは奥さんの毎日の電話に使っていたカードで二つ穴が開いている。日本人ならこの歌の意味がみんなわかると思います。この二つの穴であることも喋ったとかこんなことも喋ったと奥さんは色々考えた。そして旦那さんとの会話が走馬灯のように自分の中に蘇ってきたという歌ですね。私はこの歌

を選者として年間賞に選びましたが、とてもいい歌であちこちでこの歌の事を話しています。

テレホンカードというのは話をした後には穴が開きますよね。私はこの歌を読むとあと四つか五つ開くはずだった穴の意味を考えてしまいます。多分奥さんはあんなことも喋りたかった、こんなことも喋りたかった、あれを言い残してしまった、といったいろんな思いがこの二つの穴を見るときに思われたのではないかと私は思います。

その中で一番言いたかったことは何だったんだろうと考えると、私はおそらく「ありがとう」と言いたかったのではなかったかと思えます。経験された方もあるかと思いますが、今亡くなるうとしていての人に対して伝えるのに一番難しい言葉は「ありがとう」という言葉だと私は思います。もう亡くなるうとしていての人に「ありがとう」と言うのと、もうお別れです」と言っていることに等しい。とてもそれが言えない。もう一つは自分の持っている相手に対するこんなに深い感謝の気持ちを「ありがとう」という薄っぺらな、みんなが使うような、英語で言いますと「サンキュー」

ですね。こんなありふれた言葉で自分の思いは表せないと思います。そうしますととても「ありがとう」という言葉は使えなくなってしまう。本当に難しい言葉だと思います。

私も経験がありまして私のサイエンスの先生で市川康夫先生は京都大学の私の部屋の教授で、私が高給をけて森永乳業をやめて無給の京都大学に来たのが市川先生のところで、私が曲がりなりにも学者として生きてこられたのは市川さんのおかげだと思っています。

市川さんは膵臓癌になられて京都の洛陽病院に入院をされました。私も癌のことはやっていましたし、市川さんも癌の研究で特別の賞をもらっていました。お互いに膵臓がんがどういうものであるかということについてはよく分かっています。洛陽病院に市川先生をお見舞いに行つて、何とか市川先生に最後の感謝の言葉だけは伝えておきたい、自分が学者としてここまでやってこられたのは市川さんのおかげだ。「ありがとう」ございました」とお伝えしたかった。

大部屋だったので、いろんなことを喋りな

がら、ずっとその部屋にいる間、ありがとうございまして」と言うタイミングを計っていたのですが、ついにダメでした。いたたまれなくなってしまう川さんが、ちよっとお茶を飲ませてくれないか」と言って、それで水飲みで市川先生にお茶を飲ませて、また来ます」と言って部屋を出ました。心では「難しいかな」と思いながら、お元気で、また来ます」と言って廊下に出た時に、病室から市川さんが「永田くん、ありがとう」と叫んだのです。私も必死で、なんとかきつけを見つけて、ありがとう」と言いたかった。たぶん市川さんもそのタイミングを計っておられたと思います。面と向かって言えない、私に廊下に出るから叫ばれた。私も廊下から、ありがとうございまして」と叫んだのですが、嗚咽の方がひどくて、殆ど声になってなかったと思います。

これは私の痛切な思い出ですが、河野裕子が闘病していた10年間のことを書いた「歌に私は泣くだらう」という新潮文庫の二冊があります。その中の「節で、市川さんとの最後の別れ」のことを書いております。あの時につくづく感じたのは、

ありがとう」という自分の思いを伝えるということは、こんなにも難しいことなのか。思いが深ければ深いか、日常の言葉と違うのはいかに役に立たないか、ということを私は痛切に思いました。今日私は紹介をしませんでしたけれども、河野裕子との間にはそういう悔いはいまはありません。河野も歌をたくさん残しましたし、私も病人の河野が読んだら残酷だと思ってしまう歌も作りました。ただそれは残酷ではあるけれども、河野にどうしても知っておいてほしいという私の思いを歌にしました。

一日が過ぎれば一日減ってゆく君との時間
もうすぐ夏至だ 永田和宏

という歌があります。再発をした癌の患者さんというのは、最後の時間は引き算のようで、楽しい日は楽しいだけに、1日過ぎたら1日づつ減っていく。こんな残酷な歌を病人に見せるわけですから、ある意味では非常に酷なことですけども、やはり自分がこの時間をいかに大切に思っているかということを通して河野に知ってほしい。河野に対して何か言い忘れたとか、伝え

られなくて残念だったとかという思いがあまりありません。もう少し褒めてあげればよかったと思っっていますが、河野が元気になったら言っただけでよかった。それがちよつと残念です。

河野の方も亡くなる前日まで歌を作り続けて、特に私に向けて詠んだ歌が多かったのですが、もう自分で筆を持つ力もないのでつぶやくように言葉が出てくると、それを慌ててこちらが書き写していました。亡くなる前日にも5首ぐらいできました。

長生きして欲しいと誰彼数へつつつひにはあなたりを数ふ 河野裕子

という歌を河野が作りました。私が死んだ後はみんなで長生きしてほしいと思うのですが、あなただけには長生きしてほしい。なかなかこんなことを言ってもらえる男もいないのではないのでしょうか。

最後の歌は、

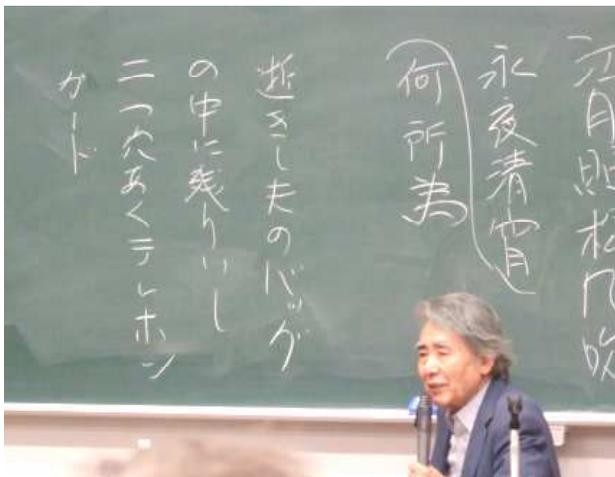
手のべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が 河野裕子

ですが、これは有名になりましたので知って頂い

てる方もあるかと思えます。私は最初 あなたとあなたに触れたき」というのは、子どもたちもいきましたので、私と子どもたちにも触れようとして、息が足りない「この世の息が」という風にとっていたのですが、ある歌人が、伊藤「彦さんですが、そうではないんだ、手をのべて あなた」と言っ、あなたに触れたいとき、そうしたい時に、私にはもう息が足りない、と読み解いてくださいました。この方が正しいですね。今は私もこの解釈です。私と河野の「君と」君 四十年の恋歌』
交春文庫」という本がありますが、お互いに相手手詠った「相聞歌」ですが、この中に5百首くらいあります。普通「相聞歌」というのは、結婚するまでの歌なのですが、わが家では結婚してからも作ってくれていました。あまりこんなところでのろけていても仕方がないのですが、今申し上げたように、何かがあった時に日本人は日本語で自分の思いをきちんと伝えるべきだ。いざ自分の思いを伝えようとすると、非常に深いところの思いというのはいく言葉にならない、口に出さうとしても伝えることができない、その時に我々は

幸いなことに短歌と言う詩型を持っていて、その歌によって自分の深いところの思いを伝えることができるという作業をしています。歌であれば恥ずかしながらに自分の思いを率直に相手に伝える、あるいは書き残して誰かに読んでもらうことが出来る。このことがすごく大切なことだろうと思います。

今日のご要望もありましたので、河上肇さんの歌にある意味社会的な背景を持った歌を多く上げてきましたけれども、河上さんの歌はもっとたくさんありまして、その中には家族とともに食べることを楽しむ、そういう歌もあります。河上肇という理論家が感性の面で非常に柔らかい部分を持って家族と一緒に過ごしてきたということを我々が追体験できる、とてもありがたい気分になっています。今日私は、河上肇と湯川秀樹という二人の巨人の歌を通じて皆さん方にお話できればと思ってやってきました。これで終わらせていただきます。



中野 一新世話人閉会挨拶

本日は河上肇先生と湯川秀樹先生の和歌をとうして心の洗われるようなお話を伺い、今とても清々しい気持ちであります。

個人的な感想を一言申し述べさせていただきますと、先きほどの河上先生の和歌の中に、次女の芳子さんの結婚の日の歌がありました。今日この会場には芳子さんのお子さんの鈴木洵子さんがいらっしやいます。どんなお気持ちで今日の永田先生のお話をお聞きになられたのか、ご感想をぜひお伺いしたいと思います。

本日はご多忙のなかこの講演会にたくさんの方々がご参集くださり、永田先生のお話を熱心に聞いていただき本当にありがとうございます。これで閉会の挨拶とさせていただきます。



河上肇・湯川秀樹略年譜

永田和宏

| 年 | 河上肇 | | 湯川秀樹 | |
|-----------------|-----|-----------------------------|------|-----------------|
| | 歳 | | 歳 | |
| 1879 (明治 12) | 0 | 山口県玖珂郡錦見村(現岩国市) 生まれ。 | | |
| 1893(M26) | 14 | 山口高等中学校予科入学。 | | |
| 1895(M 28) | 16 | 山口高等学校入学。 | | |
| 1898(M 33) | 19 | 東京帝国大学法科大学政治学科入学。 | | |
| 1902(M 35) | 23 | 大学卒業。大学院進学。大塚秀と結婚。 | | |
| 1903(M 36) | 24 | 東京帝大農科大学実科講師。 | | |
| 1905(M 38) | 26 | 教職を辞し無我苑に入る。 | | |
| 1906(M 39) | 27 | 読売新聞社入社。 | | |
| 1907(M 40) | | | 0 | 東京市麻布に生まれる。 |
| 1908(M 41) | 29 | 京都帝国大学講師。 | | |
| 1909(M 42) | 30 | 同助教授。 | | |
| 1913 (大正 2) | 34 | ヨーロッパ留学に出発。 | | |
| 1915(T4) | 36 | ヨーロッパより帰国。京都帝国大学教授。 | | |
| 1916(T5) | 37 | 「貧乏物語」連載(翌年単行本、1919年まで30版)。 | | |
| 1919(T8) | | | 12 | 京都府立第一中学校入学。 |
| 1923(T12) | | | 16 | 第三高等学校入学。 |
| 1924(T13) | 45 | 経済学部長(1ヶ月で辞任)。 | | |
| 1926(T15) | 47 | 京都学連事件による家宅捜査。長男政男病没。 | 19 | 京都帝国大学入学。 |
| 1928(S3) | 49 | 京都帝国大学教授辞職。 | | |
| 1929(S4) | | | 22 | 京都帝国大学卒業。理学部副手。 |
| 1930(S5) | 51 | 上京。第2回普選に新労農党より京都で立候補・落選。 | | |

| | | | | |
|-----------|----|--------------------------|----|-----------------------------|
| 1932(S7) | 53 | 日本共産党入党。 | 25 | 京都帝国大学講師。湯川スミと結婚。 |
| 1933(S8) | 54 | 検挙。公判。判決・懲役5年。控訴取り下げ・下獄。 | 26 | 大阪帝国大学講師。 |
| 1934(S9) | 55 | 皇太子誕生特赦により刑期4分の1減。 | | |
| 1935(S10) | | | 28 | 中間子論発表。 |
| 1936(S11) | | | 29 | 大阪帝国大学助教授。 |
| 1937(S12) | 58 | 刑期満了。 | | |
| 1939(S14) | | | 32 | 京都帝国大学教授。 |
| 1940(S5) | | | 33 | 学士院恩賜賞受賞。 |
| 1941(S6) | 62 | 京都市に転居。 | | |
| 1943(S18) | 64 | 『自叙伝』執筆着手。 | | |
| 1946(S21) | 67 | 死去。 | 40 | 学士院会員。 |
| 1949(S24) | | | 42 | ノーベル物理学賞受賞。 |
| 1953(S28) | | | 46 | 京都大学基礎物理学研究所所長。 |
| 1955(S30) | | | 48 | ラッセル・アインシュタイン宣言署名。日本物理学会会長。 |
| 1957(S32) | | | 50 | 第1回パグウォッシュ会議出席。 |
| 1970(S45) | | | 63 | 京都大学停年退職。京都大学名誉教授。 |
| 1977(S52) | | | 70 | 勲一等旭日大綬章受章。 |
| 1982(S58) | | | 75 | 死去。 |